

鴨東通信

冬

2011.12 No.84



●東山歴史逍遙 其二

清水坂の風景く非人と酒屋く

三枝暁子

●てーたいむ

仏教文化へのいざない―禿氏文庫―の世界

大取一馬

●エッセイ

日中国交正常化四〇周年を迎えるにあたって
利休とポリフォニー

鹿 雪瑩
岡本文音

●リレー連載 世界のなかの日本研究9

韓国における日本研究の現在

福井 譲

●史料探訪

南丹市岸ヶ前一号墳三号木棺出土甲冑

斉藤利彦

日中国交回復から40年、

時流に流されず、

みずからの信念を貫いた

気骨の政治家の姿を追う――

古井喜実と

中国

日中国交
正常化への道

鹿雪瑩 著

【11月刊行】

▼A5判・三〇〇頁／定価三、九九〇円

本書は、国交正常化に大きな役割を果たしながら、これまで十分な研究がなされてこなかった古井喜実（一九〇三～九五）に注目し、未公開資料をふくむ「古井喜実文書」ほか日中の資料を駆使しながら、古井を中心とした自民党内親中派による国交正常化への軌跡、交渉の裏側を総体的に検証。

◎目次◎

序 (松尾尊允)

序章 問題の所在と構成

第1部 自民党内親中派の結集とLT貿易協定の成立

――古井喜実を中心に

第1章 官界から政界へ

第2章 「自主外交」と対中政策

第3章 一九五九年の中国訪問

第4章 自民党内親中派の結集と古井喜実

第5章 LT貿易協定の成立と古井喜実

第2部 古井喜実と日中LT・MT貿易交渉

第6章 一九六八年の日中LT貿易交渉――LT貿易からMT貿易へ

第7章 薄氷の日中覚書貿易交渉――一九六九年の日中MT貿易交渉

第8章 厳冬の時代――一九七〇年の日中MT貿易交渉

補論 冬の後に春が来る――一九七一年のMT貿易交渉

第3部 古井喜実と日中国交正常化

――LT・MT貿易の延長線から見る日中国交正常化

第9章 高まる日中国交正常化の気運と自民党内親中派

第10章 日中国交正常化と古井喜実

終章 研究の成果と位置づけ

ろく せつえい：

一九七五年、中国山東省生。

中国天津外国語学院

日本語学部卒業、

京都大学大学院文学研究科

博士課程修了、博士(文学)。

現在、日本学術振興会

外国人特別研究員。



旧五条橋・現松原橋を渡り、清水寺へと続く清水坂は、清水寺および東海道をめざす人々が行き交う要衝の地であるとともに、かつては行き来する人に物を乞う人々の集住する地でもあった。すでに一二世紀には、「清水坂非人」の語が史料にあらわれ、一三世紀には長吏ちやうりによつて統率される集団を形成し、奈良坂非人との抗争を展開していたことが知られる。

彼ら非人たちが、一三〜一五世紀に

おいて、具体的に清水坂のどのあたりに拠点をもち活動を展開していたのか

については、必ずしも明らかでない。しかし一六世紀に描かれた『清水坂参詣曼荼羅』には、五条橋を渡つてすぐのところにある一の木戸のあたりに、癩者らいしやとその居住空間である長棟堂の描かれていることが明らかにされている（下坂守『描かれた日本の中世―絵図分析論』法蔵館、二〇〇三年）。したがって、これ以前から坂の入口付近に非人の集住していた可能性が想定される。その一方、応永二六年（二四一九）の著名な酒屋起請文（北

清水坂の風景 非人と酒屋

木戸北頼」の「木春」なる酒屋の名がみえる。

こうしてみると、一五世紀の清水坂は、入口から清水寺に向かつて、いくつもの酒屋が軒を連ねる地であったということになる。そのようななかで、「清水坂一本戸北頼」という、一六世紀の参詣曼荼羅にあらわれる長棟堂の付近にも、酒屋の存在していることをどのように捉えたらよいか。清水坂に位置する酒屋起請文いずれにも、「町人」の連署のみられないこととあわせて、気になる問題である。

（みえだ・あきこ・立命館大学文学部准教授）

東山

歴史逍遙

三枝 暁子

（其二）

歴史豊かな京都・東山の地への事務所移転にちなんで、気鋭の歴史研究者による東山が舞台の歴史エピソードを、連載でご紹介します

（全四回）

●「禿氏文庫」と禿氏祐祥博士

——はじめに、文庫名となっている禿氏祐祥博士についてお聞かせください。

まず、禿氏祐祥博士（以下、博士と略称）の経歴やお人柄については、亡くなられた時に出された『佛教史學』（第九巻・第一号）や、『龍谷史壇』（第四七号）という雑誌の追悼号にまとめられておりますので、それらを参考にしてお話しします。

博士は東京の高輪仏敎大学（龍谷大学の前身）を卒業後、すぐに大谷光瑞上人の将来された西域の文献の調査所に入られまして、一年余りそこで調査をされていますが、それが博士のその後の学問の拡がりへとつながっております。明治四〇年（一九〇七）に『仏敎大辞彙』、これは宗祖親鸞聖人の六五〇回忌の記念事業で出版されたものですが、その編纂主任として関わられており、これが最初の博士の大きな仕事だと思っています。やがて大正七年（一九一八）に高輪仏敎大学が京都に移って仏敎大学（現在の龍谷大学）となり、博士は同大学の図書館長として赴任されますが、そのすぐ後に仏敎史学科の教授職も兼ねて定年まで、また定年後も非常勤の

ていーたいむ

仏敎文化へのいざない ——「禿氏文庫」の世界——

大取 一馬
(龍谷大学敎授)

講師として、長く大学に貢献されました。

在職中の昭和一六年（一九四一）に「日本仏敎史学会」が設立され、これに大きく寄与されています。現在の「仏敎史学会」の前身です。

それからもう一つの大きな仕事としては、昭和三十一年（一九五六）に、親鸞聖人の七〇〇回大御遠忌の記念事業の一つとして、本願寺史の編纂所が設けられ、そこで博士が『本願寺史』の編纂にあたられたことです。寺史は現在まで続いておりますが、その第一巻のお原稿をお渡しされた直後に、博士は亡くなりました。

また、日本の印刷史に関する研究でも大きな業績を残されています。博士の著書の中に『東洋印刷史序説』がありますが、これが刊行された昭和二六年（一九五一）五月、文学博士の称号を取得されました。東洋の印刷史の研究は、西洋の印刷史に比べてものすごく手薄だったというところで、先生がこの『序説』で東洋の印刷史、日本では平安時代までの印刷史について、著述されました。写真版で資料を載せて、具体的に印刷史についてまとめられておられますが、これは当時としては、画期的なことでした。

さらに、博士の喜寿の記念の年に、『仏敎と

美術』という本を出版されております。こちらでも博士のご研究の主たるもので、それまでに書かれた仏教美術に関する論文をここでまとめておられます。

昭和二年（一九四七）刊行の『古経群玉』は、古いお経、この場合は日本で印刷されたものに限っていますけれども、その版本を切つて、貼り付けられたものです。その切り抜きが書写のものだと「古筆手鑑」となりますが、これは版本の手鑑なんです。限定数十部しか出されていません。書誌学的な研究を進めておられましたから、紙に関する蔵書もたくさんお持ちでした。「紙見本」まで蔵書の中に含まれています。

『京都社寺境内版画集』というのも出されております。これは博士がお持ちの版画を含めた、一枚摺の版画をまとめて編集されたものなんです。版画には木版のものあれば、石版、銅版のものもあって、解説のところで一枚摺版画の歴史やその出版史、用紙のことなどにも詳説されております。こういうご著書から、蔵書がどんな内容かも大体分かるんですね。

——一言ではとらえきれない、幅広い研究内容ですね。

それまでの仏教史学では、関係資料を羅列しただけで仏教史だとするのが主流だったそうですが、博士は歴史の中で仏教の果たした役割という視点から、仏教史を語ろうとされたんですね。そこが非常に新しいところなんです。そして、文化全体を見ようとしておられたんですね。それも日本だけでなく、今という東アジア全体、日本を超えた全体の、それも幅広い分野にまたがるよ

うな研究をされていたんです。

また博士は仏教書誌学の草分け的な存在でもあり、仏教書の紙や筆跡などをみて資料の製作時代などを鑑定されたりしました。

そのような書誌学的な研究は、今でこそ当たり前になっていますが当時としては新しい、実証的な学風であったのです。筆跡から親鸞聖人の真蹟を鑑定されたりするなど、真宗史にも大きな業績を残された方です。

博士のお人柄については、終生世間の名利に超然としておられたと、そして研究に対して真摯で謙虚な方であったということは何人もの方が述べておられました。だから文学博士の学位も、人に勧められてようやくまとめられたようです。

●ユニークな資料の数々

——博士の蔵書が龍谷大学図書館に収められ、『禿氏文庫』となったのですね。

博士の古希の時に、蔵書のうち重要なものが千点余り寄贈されました。その後もう一度寄贈されており、それが現在の禿氏文庫で、全部で二、三六〇点余りあります。仏教史がご専門の先生でしたから、やはり真宗を含む仏教書が中心です。

特に貴重書と考えられるのは、平安時代末期から鎌倉初期にかけての仏教經典とか儀軌（儀礼・行法などを書いたもの）等の古写本の類です。それには、これまで禿氏文庫でしか存在が確認されていない資料もあります。たとえば『無量寿経五惡五善諺解』

や『一乗八講師問者手記』などは、まだ内容調査などもなされておらず、新出資料です。

また『聖光上人傳』などは版本はあっても写本がほかに一本も残されておらず、この文庫にしか存在しないものです。『興福寺奏達狀』という江戸時代の写本は、「興福寺奏狀」として世に知られている本の異本で、「奏狀」の草稿であった可能性のある貴重書です。それから『愚迷発心集』という室町時代の写本

は、現在、最も古いとされている東大寺祐成本をさらにさかのぼるという指摘もあり、貴重書といえるでしょう。

そのほか、絵図がたくさんありますが、博士が著書として出されているもの以外では、あまり手が着けられていないんですね。絵図には社寺に関係するものが多く、そこから信仰の歴史などが分かってくるんじゃないかと思うのですが。

国文学関係の資料でも、やはり仏教に関係する作品が集められています。だから分野を限らずに、仏教史の実態が分かるような資料を横断的に集めようとしたのかなと思います。『富士の人穴』という奈良絵本の資料もあり、これは当時の山岳信仰、富士信仰のありかたが分かるもので、美術的な興味よりもそういうところに博士の蒐集の視点があったのではないかと思うんです。

その『富士の人穴』については奈良絵本のもの、もう一つ、絵の付かないお伽草紙の書写本がありますが、その奥書に、書写



をした人物により、麻疹（はしか）にかかった時に書写をおこなった経緯が書かれています。つまり、そのお伽草紙を書写することで、富士権現のご利益を得て、病気が治ってほしいという願いが込められている。当時の信仰のありかたみたいなものが、非常によく現れているんです。江戸時代後期頃にこの『富士の人穴草紙』が多数書写されていますが、博士はこの奥書を見られて、その当時の信仰の実態がここから分かると思われ、蒐集されたのではないかと思います。

●目録制作にむけて——調査研究の現状

——資料の分野が横断しているために、調査研究にあたっても、広範な視点が必要になりますね。

そうですね。調査研究の方向としては、取りあえず文庫資料の全体を見ておこうということ、今まで文庫の総目録がなかったものですから、まずはその総目録を作って、博士の文庫はこれだけあるんだということを示しておこうと思っています。

文庫の資料は一分野に限りませんので、図書館に寄贈されて以来、それを整理して総目録を作る作業は今までなされておりません。図書カードで書名こそ見られても、全体を見ることはできないので、文庫に何がどれだけ入っているのか、今まではつきりと全体がつかめなかったんです。文庫の調査が進まなかったのも、

一つの分野の人だけでは調査できなかったからなんです。しかし平成二〇年に、真宗・仏教・国史、そして国文と四分野の研究者が一緒になって調査に入ったんです。

これまでの調査の成果としては、文庫の貴重書を写真版によって掲載した龍谷大学善本叢書二九『禿氏文庫本』（思文閣出版）を出版したことが、また今年、研究グループのメンバーで禿氏文庫の研究論文を掲載した、研究叢書（第二八『典籍と資料』、思文閣出版）の出版が挙げられます。指定研究期間が二〇一一年三月までで仏教文化研究所での三年間の研究は一応完了したことになるのですが、でも是非とも総目録は作りたいということで、図書館側の仕事として、引き続き総目録制作の仕事に携わっております。作業を進める上では、図書館側の協力体制が欠かせないですね。個人文庫である上に、貴重書も多いので、普通に見ようと思えばいちいち貴重書閲覧願いを書かないといけません。ところが、こうして目録を作るためということでしたら、図書館にも全面的に協力していただけるので、非常に助かっています。

現状は、文庫のほぼ全資料を分類し、並べ終わった段階です。ただ並べるにしても、一つの分野の者だけでは絶対進められませんが、たとえば、仏教書ならその作品がいつ頃のものかというのは、国文学の研究者にはよく分かりません。また、内容からみてそれを仏教書のどこに分類したらいいのかも分かりませんからね。ただ今回の目録制作作業には、四分野の研究者が一緒に入っているというわけではなく、国文学の者が中心に入っていますので、分

類するのが大変なんです。

すでに一般には、禿氏文庫には貴重な蔵書があるということが知られております。しかし、これまで研究で使われてきたのはほんの一部でした。それはやはり、目録がなかったからなんです。せっかく博士が研究のためにと思って寄贈してくださった蔵書群が、目録がないために、これまで充分活用してもらえなかったのです。

●「禿氏文庫」から広がる仏教文化

今後は、まず調査した文庫の総目録を近々に出版して、研究者の目に触れるようにしたいです。そうすれば、各資料の内容を各分野の研究者が精査して、歴史の中における仏教の果たした役割というのを、より明らかにすることができないかと思えます。それは博士のご研究の方向でもあるんです。

また先述の博士が著述された『東洋印刷史序説』が刊行されてから、五〇年以上が経ち、印刷史の研究は格段に進歩していますが、それでも文庫の資料を用いれば、それ以降の印刷文化史について、より明らかにすることができないかと思っています。いわば、博士のご研究の追体験みたいなことをしながら、博士が持っておられた資料を精査すれば、さらに仏教文化の研究を深めていけるのではないかと考えております。

（二〇一一年一月一日 於・思文閣出版）

日中国交正常化四〇周年を迎えるにあたって

鹿^{ろく} 雪^{せつ} 瑩^{えい}

来年の二〇一二年は日中国交正常化四〇周年を迎える。中国には「水を飲むときには、井戸を掘った人のことを忘れない」という言葉があるが、一九七二年九月の日中国交回復の折、周恩来総理はこの言葉を使って、関係正常化実現のために尽力した政財界をはじめとする日本各界の人々を高く評価した。厳しい国内外の政治環境のなか、こうした人々の辛労と努力なしには、日中国交回復はそう簡単に実現できるものではなかったからである。

井戸掘りの一人として、自民党政治家の古井喜実^{ふるいよしみ}がいた。拙著『古井喜実と中国——日中国交正常化への道』（巻頭に広告）は、古井が京都大学に寄贈した「古井喜実文書」の中の多くの未公開・未公開の資料を使って、彼が半官半民のLT/MT貿易ルートを通じて、日中国交正常化まで辿ってきた道程を明らかにしたものである。

日中関係の今後を探るうえでは、過去を知ることが不可欠である。現在の日中関係は、一九九〇年代まで現状凍結であった尖閣諸島領有問題が、去年の秋に再燃したのをはじめとして、さまざまな争点を抱えている。国交正常化を望んだ当時とは一転、日本

の世論は尖閣事件などで対中感情が悪化し、中国も対日態度を強硬化させている。ただし、状況は日中両国が政治的には対立し、経済的にはわずかな貿易量しか占めていなかった国交回復前と大きく変わった。二〇〇七年に中国が米国を抜き日本にとって最大の貿易相手先となって以降、日中貿易は拡大傾向が続ぎ、中国は日本にとって生命線といえるほど極めて重要な市場になっている。経済のみならず、政治・社会・軍事安保なども、中国抜きでは考えられない時代になってきているのである。

今から五二年ほど前の一九五九年一〇月、古井喜実は戦後はじめて中国を訪れたが、その帰国後の所見では、「幾年かの後には、アジアの、また世界の最大の国が中国だということにならぬとも限らぬ。……成長しつつある中国を無視しては、アジアの安定も世界の平和も成立たぬ筈である」と述べた。彼の予言は現在まさに現実となり、それどころか、中国の経済膨張に脅威を感じる人がいるほどになってきたのである。

中国の経済発展は日本にとって脅威ではなく、チャンスだとの見方に同感している。しかし、日中がそれぞれの立場に固執して

争えば、折り合うことができないうえ、かえって新しい対立を助長するおそれがある。中国では、「天下を取ることは易しいが、天下を治めることは難しい」とよくいわれている。日中国交正常化までは「天下を取る」道だとすれば、それをどう維持していくかは、日中両国にとって今後の大きな課題となっているのではなからうか。

両国関係の持続的な発展を推進するため、二〇〇八年五月に日中両国政府が「戦略的互恵関係」を打ち出し、また、両国の友好人士、友好団体などもその対策を探っている。今年二月一〇日、日本日中関係学会が開催したシンポジウムでは、コンサルタントの篠原令氏が過去の日中関係を振り返り、明治維新から国交回復まで日中友好を支えてきたのは民間が主体だったが、その後の三〇年間は日本政府が日中関係を促進してきたと分析し、現在の危機は「政府もあまり日中友好を言わなくなり、民間にも日中友好に積極的な携わっていく人がいなくなり、政府にも民間にもパイプがなくなったこと」だと述べた。

また、今年六月二十四日、日本日中関係学会・中国中日関係史学会国際シンポジウムで王泰平中日関係史学会副会長は、戦略的互恵関係を推進する前提条件は「戦略的信頼関係」にあると強調し、「共同発展」は戦略的互恵関係の中心となる内容であり、両国は負けるか勝つかの関係や、栄えるか滅びるかの関係ではなく、ともに繁栄の道を歩まねばならないと指摘した。さらに「民間友好」は戦略的互恵関係の基礎であると述べ、多レベル、多ルート、

多領域の交流拡大を訴えた。

私は以上の見解に深い感銘を受けている。そこで改めて古井喜実と彼が堅持したLT/MT貿易ルートの尊さを感じさせられた。現在も古井のような政治家と日中両国をつなげる相互信頼のルートが必要となっているのではないかと思った。

しかし、日中双方ともに、お互いが抱えている問題や取り組みの姿勢を十分に把握できておらず、相互信頼も欠如しているのが現実である。一方、今年三月に発生した東日本大震災からの復興過程で見られるように、日中両国がともに持続的な発展をしているには、相互タイアップが必要となっているのも現実である。そのためには、前述の国際シンポジウムで提唱されたように、戦略的な相互信頼と協力が必要だが、こうした相互信頼はお互いに熱意と誠心誠意を持って付き合わなければ築けない。

一九六二年九月、古井喜実は二度目の訪中を果たしたが、大先輩の松村謙三に対する中国側の信頼をみて、「歴史は人間がつくる」ということを痛感し、日中関係打開を自らの使命として邁進して、中国との相互信頼関係を築いたのである。こうした先達たちはあの困難な時代に、熱意と誠心誠意を持って両国間の厚い壁を打ち破ったのだから、現在も、国としても、個人としても、利益関係だけを考えずに、お互いが相手の立場を考慮しながら、このような精神を持って付き合おうではないかと、日中国交正常化四〇周年を迎えるにあたってしみじみと感じている。

(日本学術振興会外国人特別研究員・同志社大学客員研究員)

利休とポリフォニー

このたび、拙著『茶の湯と音楽』を上梓する運びとなった。その内容は、音楽、もしくは音を媒介としての茶の湯の性格、美的価値観、そして精神の考察である。

社会人大学院生として修士課程に入学した当初から、茶の湯と音楽とのかかわりについて考えてきたのであるが、そのきっかけは、ふと頭によぎった夢想——千利休がポリフォニーの音楽を耳にしたとき、どんなふうに聴いて、なにを感じたのだろうか、ひいては、利休が深化させた佗数寄の茶の湯に、音楽がなんらかの影響を及ぼしていたとは考えられないのか——である。もちろん、茶の湯の実践現場において、構造化された西洋音楽が鳴り響いたなどと考えることではないが、荒唐無稽と一笑に付されかねないようなことである。しかしながら、利休がポリフォニー音楽を聴いた可能性は、あながち否定できないのである。

ヨーロッパでルネッサンス音楽がたけなわであった一五四三年、日本と西洋の交わりの歴史が、火縄銃を携えたポルトガル人の種子島漂着によって始まる。六年後にはイエズス会宣教師フランシスコ・デ・ザビエルが、キリスト教の布教を始めている。布教活

岡本 文 音

動にもなつて、さまざまなヨーロッパの文化が日本にもたらされたが、とりわけ音楽はキリスト教の布教には不可欠なものであり、日本でもいち早く宣教師たちによって音楽教育が施された。

一五五二年の降誕祭には、ポルトガル人宣教師たちがグレゴリオ聖歌を歌い、歌ミサが献げられているが、一五五七年の聖週間における諸典礼は、日本人信者による訓練された二つの聖歌隊によっておこなわれている。このときの合唱は“*em canto d'orgão*”によるものであった。これは多声音楽、すなわち、ポリフォニーのことである。ポリフォニーの多声部合唱というのは、当時の日本の音楽事情から考えると、驚異的なことである。日本の伝統的な音楽による歌唱は、たとえば能楽の謡や仏教の声明に象徴されるように、同音の単旋律によって歌われるモノフォニーであり、多声部による重唱で歌われることはないからである。

一五七九年にイエズス会巡察師アレックスサンドロ・ヴァリニャーノが来日し、各地に神学校（セミナリオやコレジオ）を設立して日本人少年の教育に力を尽くし始めるに及んで、音楽の面でも飛躍的な進歩がみられる。セミナリオの生徒たちは、毎日、ポリ

フォニーの合唱で歌うことやクラヴォ（鍵盤楽器）を弾くことを学び、易々と、正式なミサを歌うことができるようになっていく。

大内義隆がクラヴォを、大友義鎮（宗麟）がヴィオラを聴き、また、織田信長は安土山のカザ（修院）を訪問し、クラヴォとヴィオラを演奏させ、これを聴いた記録が残されているが、豊臣秀吉は本格的で、技術的にも相当に優れた西洋音楽を聴いている。

天正遣欧使節の四人の少年たちは、ヨーロッパを巡り、当時、花盛りであったルネッサンス音楽を聴き、そして吸収し、一五九〇年に帰国する。帰国後の秀吉との謁見では、秀吉の命により、少年たちはクラヴォやアルバを演奏し、それに合わせて歌っている。秀吉は、繰り返し演奏させるなど、西洋の楽器や音楽に大いに興味を示している。このときの曲目は、ジョスカン・デ・プレ作曲の「千々の悲しみ」ではないかと推察されているが、この曲は、恋人を失った悲しみを歌った四声のシャンソンで、当時ヨーロッパで広く愛好されており、「皇帝の歌」という別名をもつ。

一方、ヴァリニャーノは日本布教のための手引書『日本イエズス会士礼法指針（原題…日本の習俗と気質に関する注意と助言）』を作成し、キリスト教施設のなかに、茶の湯を積極的に取り込み実践するよう、茶の湯のための座敷を設け、茶の湯の心得のあるものを常住させることを指示している。その座敷も、茶会（茶事）のできる本格的なものであったようだ。ヴァリニャーノの通達により、茶の湯と典礼ミサにおける西洋音楽という、まったく異質と思われる文化が、十六世紀末の日本において、教会という

空間のなかに同時に存在する結果となったのである。

利休七哲にも数えられるような利休の弟子に、高山右近をはじめ、蒲生氏郷、牧村兵部、瀬田掃部というキリシタン大名がいる。かれらはミサにも参列し、時には声を合わせて歌うなどしていたはずである。かれらのなかにも、茶の湯と、キリスト教音楽としてのその当時の西洋音楽が、共存していたのである。

一五八七年、秀吉によって初の伴天連追放令が出されるまで、時の為政者たちは、必ずしもキリスト教に理解があったわけではなくとも、布教の許可をあたえるなど、イエズス会を保護してきた。為政者から迫害されることなくキリスト教の布教活動をおこない、隠れることなく教会でミサを献げ、音楽を奏することができた時期があったのである。

そうであるからこそ、信長や秀吉に茶頭として仕えていた利休が、信長や秀吉に随伴・同座したおりに、キリシタンによる西洋音楽に接し、ポリフォニー音楽を聴いたかもしれないの考えも、あながち否定できず、もし、聴いたとするならば、複数の声部が、それぞれに旋律の横の流れを主張しながら、対等の立場でからみあっていく様式の音楽であるポリフォニーは、モノフォニーの単旋律の音楽しか聴いたことのなかった利休にとって、まさしく耳を疑う、衝撃的な音楽であり、創造意欲を刺激する音楽であったに違いないと考えるのである。

このような夢想から、わたしの研究は出発したのである。

（高野山大学客員教授）

韓国における日本研究の現在

福井 譲

いささか大掛かりなタイトルをつけてしまったが、朝鮮近代史を研究している者として、日本研究においては門外漢であることを認めねばならない。それでも筆者の置かれた環境を考えればそれはまったく無関係ではなく、むしろ密接な関わりのある存在である。それゆえ以下では韓国における日本研究について、筆者の見聞を基にいくつか述べてみたい。

二〇〇二年のワールドカップ共同開催を境に、日韓両国の関係が一大転換点を迎えたことには異論を待たないであろう。それと前後して日本国内では韓国の文化・芸能が注目されるようになり、いわゆる「韓流ブーム」を巻き起こすこととなった。かつてはお世辞にもメジャーとはいえなかった朝鮮語は、今やその存在感を一新してしまった。街中の書店に足を伸ばせば、以前とは比べ物にならないほどの種類と分量の参考書を手にとることができる。もはや大学での第二外国語の一つとして認知されており、また海外語学研修先の一つに韓国を設定している大学も多い。

一方で韓国においても、日本に対する関心が高まったのである。それ以前よりもさらに文化開放や市民レベルでの交流が深

化したのは事実である。ただ地理的な近似性に加え、日本による植民地支配という特別な歴史を持つingこともあり、もともと韓国において日本研究は主要な研究分野としてその存在感を有している。ただし植民地期の高等教育に対する制限から、京城帝国大学（当時）や延禧専門学校（現在の延世大学校）など一部の教育機関に限られ、その担い手もほぼ日本人であった。より広く韓国人の手によって日本研究が担われるようになるのは解放後のこと、一九六一年に韓国外国語大学校に日本語科が設置されることで本格化することとなる。

ところで韓国では「日本語」「日本文学」の略語として「日語」「日文」が存在し、大学の組織名でも多用されている。実際、全国に約二二〇校があると言われる四年生大学において、日本関連の学科は約七〇であり、その大半において「日語日文学科」という名称を使用している。この名が象徴するように、現在の韓国において日本研究といえば語学と文学、すなわち日本語学と日本語教育学、そして日本文学によって占められているといつてよいだろう。試しに日本に関する学会の大会プログラムや論文集の構成を

一瞥しても、「韓国日本学会」(一九七三年設立)や個別分野に関する一部の学会を除き、その大半は「日本語学」「日本文学」「日本学」の三本柱で構成されているのが一般的である。つまり、語学と文学以外の諸分野は「日本学」という枠組みで括られることが多いのである。

もちろん、日本史研究が存在しない訳ではない。ただ韓国において日本史は「東洋史」の一部として位置づけられており、前述の日本研究に対する認識との関係もあって、残念ながら個別の研究分野として確固たる地位をまだ与えられていないのでは、というのが筆者の率直な印象である。現にソウルの主要大学を見ても、一つの大学に複数の日本史研究者を擁している事例はさほど多くはない。史学科東洋史専攻や日本学科でも数名いれば良い方であり、歴史関連学科でありながら日本史研究者を一人も持っていないことも決して珍しくはない。また研究者の対象とする時代にも偏向が見られ、やはり多数を占めるのは近現代史であり、それに次いで古代史、他方で中世史や近世史はごく少数にとどまっているのが現状である。さらに韓国の特徴として、いずれの時代に関しても自国との関わりで日本史を捉えようとする「韓日関係史」という視座が広く受け入れられている点が挙げられる。

こうした現状にはさまざまな背景が考えられるが、何より韓国社会が日本研究に求めているもの、すなわち日本について学ぶ学生の関心対象と密接な関わりがあるだろう。最近の学生を見ると、その大半はアニメやマンガ・音楽・小説など現代日本文化に目を

向けており、総体的に日本史に関する関心は決して高いとは言えない。そのため史料の読解・分析に必要な古典文法や古文書読解法などの講義・演習は、大学院のレベルであってもなお少ないのが実情である。なお日本史に関心を持ち専門的な研究を志した学生は、日本留学を選ぶことの方が多いようである。実際に日本へ留学してから史料の扱い方や調査法など、日本史研究に関わる技術的側面を本格的に学んだという経験談を、筆者は何度か耳にしたことがある。

韓国において一流校とされる「SKY」、すなわちソウル大学校・高麗大学校・延世大学校のうち日本関係の学部・学科を有するのは、現時点において高麗大学校だけしかない。ところが本年一月一日、ソウル大学校が来年初頭に「東アジア言語学部」を新設し、その中に日本関係の学科を設置する旨がマスメディアによって伝えられた。歴史的背景から長らく日本研究に距離を置いていた同大学であるものの、一九九五年設置の地域総合研究所日本研究室を二〇〇四年には日本研究所へと拡充するなど、少しずつではあるものの着実な「インフラ整備」を進めていることも確かである。今後の日本研究の発展に期待しつつ、さらなる研究環境の拡大に注目したいところである。

(韓国・仁済大学校人文社会科学大学日語日文学科専任講師)

史料

探訪

(47)

南丹市岸ヶ前二号墳三号木棺出土甲冑

齊藤利彦さいとう とし ひこ

(佛敎大学宗教文化ミュージアム 学芸員)

平成二十四年(二〇一二)に開学百周年をむかえる佛敎大学は、仏敎精神に根ざした人間教育に力を注ぎ、「人間を見つめる開かれた大学」として、研究・教育に邁進している。

本館は佛敎大学の附置機関で、文部科学省オープン・リサーチ・センターの補助金で設立されたアジア宗教文化情報研究所を母体とし、平成二十年(二〇〇八)四月にミュージアムに改組され、開館した。

設立の趣旨は、人文学領域の研究の発展に寄与するとともに、社会貢献を行うことにある。広く一般市民にさまざまな生涯学習の場と機会を提供し、仏敎を中心として、宗教文化全般に関する理解を促すことを目指している。活動としては「シルクロード部門」「歴史文化部門」「浄土宗文化部門」といった研究部門を持ち、宗教文化に関する調査研究とその成果を、特別展示や企画展示で公開している。また併設する劇場施設「宗教文化シアター」では、宗教芸能を中心に無形文化遺産の公演などを年四回ほど行っている。

さらに本館は佛敎大学所蔵の有形文化遺産の一部を展示公開し

ているが、それらのうち、佛敎大学園部校地より出土した甲冑などの考古遺物を中心に、以下、紹介してみたい。

園部校地は昭和六十三年(一九八八)、佛敎大学が旧園部町(現南丹市)に取得した約三十六万平方メートルの規模の校地である。旧園部町は、日本でも最古級の古墳とされる黒田古墳に代表されるように、多くの遺跡や遺物包蔵地であることで知られ、大学校地にも京都府遺跡地図より、古墳二基・窯跡十箇所があることが認識されていた。

平成六年(一九九四)四月、佛敎大学は校地整備・造成に先立ち、「佛敎大学校地(文化財等)調査委員会」を設け遺跡調査を行うこととした。

まず、分布調査や踏査による周知遺跡の確認がなされ、同七年(一九九五)より、壺ノ谷窯址群の位置確認と記録作成を実施するとともに、二基の古墳(岸ヶ前一号墳・同二号墳)の本格的調査がなされ、その後、多くの成果をあげることとなる。

遺跡地図でも認められていた岸ヶ前一号墳・同二号墳のうち、一号墳は現状のまま保存することにし、地表観察からは所在が判

然としなかった二号墳は遺構や遺物の残存状況から、緊急に発掘を行つたうえで保存する方針がとられた。

二号墳は地山である砂岩層に堀りこまれた墓^{ほこら}があり、四つの木棺が確認されたが、そのうち三つの木棺は東西にならび、残り一つは三つの木棺の北側に東西に向いてつくられていた。

これら三つのうち、三号木棺は細長い墓^{ほこら}の底の部分に、丸みをもつた木棺がおさめられていて、その北側から鉄製の甲冑・堅櫛・玉類（勾玉・管玉）などが多数出土した。

とりわけ甲冑は、衝角付甲と短甲、肩甲などから構成されるもので、良好な状態で原型をとどめていた。南丹市域には数多くの古墳が存在するが、これほど原型をよく残した甲冑の出土は珍しく、この地域の考古学・古代史を考察するうえでも貴重な資料といえる。



「岸ヶ前二号墳三号木棺出土甲冑」
(佛教大学宗教文化ミュージアム蔵)

短甲のなかには、首を防御するための頸甲も入れられていたことから、この短甲は寝かせた状態で遺骸の頭の部分にそえて置かれたものと考えられている。また短甲の下側の床面からは鉄剣・鉄製刀子・鈎針なども出土したが、これらの遺物は短甲がすえ置かれる前に置かれたものと推考される。

甲冑のほかにも、同墳からは多量の玉類が出土している。玉類は緑色や赤色メノウなどの勾玉、管玉から構成されており、とりわけ大ぶりの碧玉（メノウの一種）製勾玉は長さ約六センチもあり、出土段階で府内最大であった。

さて、この古墳に葬られた人物は古墳時代、旧園部町の一部で勢力をもっていた地域の有力者と推測されているが、甲冑のほか、刀剣などの武具も複数出土しており、棺の主のよつたところを反映しているといえよう。

また校地のなかには壺ノ谷窯址と称される窯址群が存在する。群内にある五つの谷筋のなかでも、最も園部盆地に近い谷筋につくられた三基の窯の中央に位置するのが十号窯である。この窯からは坏・高坏・横瓶・甕などが出土した。

地下式の窖窯である十号窯は残存状態が大変良好であったことから、遺構の保存・活用という面を考慮し、株式会社京都科学に委託して、型取りと剝ぎ取りによって複製の製作を行い、窯体そのものを復原展示できる処置を行った。

復原した十号窯は現在、宗教文化ミュージアムの窯址展示スペースにて展示公開している。同じく、出土した甲冑や鉄刀、勾

玉も宗教文化ミュージアムの常設展示として公開している。そのほか、園部校地から出土した杯・高坏・甕類も展示しており、南丹地域の考古学的世界を紹介している。

なお、本館では来年度、佛敎大学開学百周年を記念する特別展示、シアター公演を、年間を通して企画しているが、百周年記念プレ企画として、平成二十四年二月六日から三月四日の約一ヶ月間、平成二十三年冬期特別展示「研究の肖像——佛敎大学ゆかりの先生と研究ノート——」を開催する。

研究者が残した研究ノートや講義ノートは、その研究者の思考過程や考察の方法論などを考えるうえで重要な資料であり、またいかに学問と対峙したか、あるいは、学生への教育とそのあり方などを、後進のわれわれに伝えてくれる貴重な「学術財」である。

本企画は佛敎大学の前身、佛敎専門学校の歴代校長の著作や、佛敎大学に奉職された先生方の著作や研究ノート・講義ノートを展示し、その思考過程や考え方を紹介するとともに、開学百年のあゆみを概観する内容を予定している。具体的には、二代目学長高畠寛我先生や、古代チベット史の大斗佐藤長先生ひさしのノート類である。

京都市右京区は広沢池のほとりにある本館へ、おみ足をお運びくだされば幸いです。

— MEMO —

佛敎大学・宗教文化ミュージアム

京都市右京区嵯峨広沢西裏町5-26
Tel. 075-873-3115

・JR 京都駅より《市バス》59号系統（一部）「広沢池・佛大広沢校地前」下車すぐ。10・26・59号系統

「山越」下車、西へ徒歩約13分。91・93号系統「広沢御所之内町」下車、北へ約8分。

・入館料 無料

・開館時間 午前10時～午後5時30分（入館は午後5時まで）
日・祝・大学の定める日は休館、特別展など行事開催期間中は開館

【開催中】2011年12月11日（日）
秋期特別展示

「百万遍知恩寺の名宝——創建から現在への軌跡——」
第一研究成果展示室

【予告】2012年2月6日（月）～3月4日（日）
特別企画 佛敎大学開学100周年記念

「研究の肖像——佛敎大学ゆかりの先生と研究ノート——」
第二研究成果展示室

第14回宗教文化シアター公演

「日本の音楽 世界の音楽 アジア大乱調——民族音楽と乱拍子——」

日時 2012年1月28日（土）午後14時～

解説 小野田俊蔵（本館館長 佛敎大学歴史学部教授）

出演 アポ ハンマダン 室優哉

来年度展示・シアター公演については詳細がきまり次第、本館ホームページにてお知らせします。

書評・紹介一覧 8～11月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事〔敬称略〕
象徴天皇制の形成と定着 (評)『史林』第94巻第5号(河西秀哉)	仁明朝史の研究 (紹)『三重大X』第26号	
中世前期女性院宮の研究 (評)『日本歴史』第759号(伴瀬明美)	(評)『日本史研究』第589号(京藤紀昭)	
知の伝達メディアの歴史研究 (評)『日本の教育史学』第54集(橋本伸也)	戦国期権力佐竹氏の研究 (評)茨城新聞 11/13(糸賀茂男)	
明治期における不敬事件の研究 (評)『日本教育史研究』第30号(平田論治) (評)『日本の教育史学』第54集(高橋陽一)	船簞笥の研究 (評)『月刊美術』第431号 (紹)新聞赤旗 8/28 (記)新聞赤旗 10/17(若林明)	
韓国「併合」前後の教育政策と日本 (評)『日本教育史研究』第30号(佐藤由美) (評)『日本の教育史学』第54集(井上薫)	(紹)『サライ』12月号(友友和子)	京都療病院お雇い医師シヨイベ (評)京都市民報 第2496号(三宅成恒) (評)『青蓮会報』第157号(佐野豊) (紹)京都新聞 10/23
奈良朝人物列伝 (評)『日本歴史』第759号(松尾光)	法然伝承と民間寺院の研究 (紹)中外日報 9/15	
一休派の結衆と史的展開の研究 (記)『文学・語学』第200号(三角洋一)	越境する漱石文学 (評)熊本日新聞 10/9(飛ヶ谷美穂子)	
小児科学の史的変遷 (評)『日本医史学雑誌』第57巻第3号(七木田文彦)	織豊期主要人物居所集成 (紹)日本古書通信 第985号 (紹)『歴史街道』10月号(佐々木賢治) (紹)『歴史読本』10月号 (評)京都市民報 第2509号(山本兼一)	
安祥寺資財帳 (評)『日本歴史』第761号(松田和晃)	田能村竹田基本画譜 (紹)朝日新聞東京本社版(夕刊) 8/31 (記)大分合同新聞(夕刊) 9/1(渡辺恭英) (紹)『アートコレクター』10月号	
日本文学の「女性性」 (紹)『昭和文学研究』第63集(掛野剛史) (評)『日本文学』第60巻11号(倉田容子) (紹)『日本近代文学』第85集(江種満子)	一八世紀日本の文化状況と国際環境 (記)読売新聞(夕刊) 9/22(鈴木隆弘)	
地域開発と村落景観の歴史的展開 (紹)『多摩地域史研究会会報』第99号(外池昇) (評)『地方史研究』第353号(北村厚介)		
近世京焼の研究 (紹)『陶説』第701号(小野公久)		

8 月から 11 月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	定価	発行月
一八世紀日本の文化状況と国際環境	笠谷和比古編	1580-5 C3021	8,925	8
富士川游著作集(全10巻)		1586-7 C3347	94,500	9
絵巻 大江山酒吞童子・芦引絵の世界	逸翁美術館編	1591-1 C1071	1,050	9
朝鮮科学史における近世	任正燦著	1587-4 C3010	6,300	9
焼畑の環境学	佐藤洋一郎監修／原田信男・鞍田崇編	1588-1 C3061	9,450	10
古井喜実と中国	鹿雪瑩著	1590-4 C1031	3,990	10
歴史のなかの源氏物語	山中裕編	1423-5 C1021	2,310	11
九州の蘭学(2刷)	W.ミヒエル・鳥井裕美子・川島真人編	1410-5 C1021	2,625	11

8 月から 11 月にかけて刊行した継続図書

シ リ ーズ 名	配本 回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	定価	発行月
東寺百合文書	9	9	ト函二、チ函一	1585-0 C3321	9,975	10
浄土宗叢書	1	1	観経疏之抄 玄義分 中	1593-5 C3015	5,250	10
龍谷大学仏教文化研究叢書	28	28	典籍と史料	1592-8 C3091	8,925	10

(表示価格は税 5 %込)

営業部より

▼学会大会での即売会はもちろん、最近、図書館へ書籍現物を多数持参して、選書をしてもらう機会が増えてきました。以前より幾度か腰を痛めたこともあり、その調子が気になっていますが、一向に悪くなる気配がありません。

振り返れば、痛めるのはいつも倉庫整理のときのような気がします。ということは、書籍販売と倉庫整理の業務内容の違いに、腰痛の要因があるのでしょうか。病いは気から？

(江)

☆フェア情報

ジュンク堂書店新宿店(東京都新宿区)

歴史書懇話会フェア「砦・城・城下町」

12月中旬まで

広島大学生協北1コープショップ

(広島県東広島市)

歴史書懇話会フェア

12月中旬まで

東京大学生協

本郷外売店(東京都文京区)
駒場外売店(東京都目黒区)

歴史書懇話会フェア

2月29日まで

編集後記

▼京都は仏教文化はもちろんのこと、仏教化と深いつながりをもつ印刷文化も歴史的に盛んな土地柄ですが、禿氏文庫はそうした京都の歴史という視点からも、興味深い史料群だなあと感じました。それだけにいつそう、今後の目録化が待ち望まれます。

(大)

▼先日終了したNHKのディープブルーは秀逸でした。毎回、ある業界を代表する三人による深すぎるトークを関根勤が巧みに解説、視聴者に伝わる面白さを引き出していました。我々学術書の編集者も関根勤たれ！(M)

▼気づけばもう師走。入社以来、この時期から年度末にかけてはひたすらに時間との戦いです。著者・執筆者、印刷会社のみならず、倒れている暇はありません。刊行まで体調にはくれぐれも気をつけましょう。

(須)

▼学術書の刊行が多い小社。そのため、お客様は図書館が多い現状です。お忙しいところ突然の営業で迷惑をおかけするかと思いましたが、何卒よろしく願います。

(一)

▼今年は厄年でしたが、ありがたくも大病なく過ごせました。日本中が災厄に見舞われた年、再生の日の出を心より祈ります

(h)

▼表紙図版「無題」岡本東洋撮影(東洋花鳥写真集鳥之巻第17輯)芸艸堂、1941年)『動物・植物写真と日本近代絵画』より

定期購読のご案内

『鴨東通信』は年4回(3・6・9・12月)刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうふうしん

鴨東通信 四季報 No.84

2011(平成23)年12月9日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷲草デザイン事務所

焼畑の環境学——いま焼畑とは

佐藤洋一郎監修／原田信男・鞍田崇編

【10月刊行】

●内容●

総説 佐藤洋一郎(総合地球環境学研究所副所長・教授)

I 焼畑の原像と衣食住

縄文残映

小山修三(国立民族学博物館名誉教授・吹田市立博物館館長)

繊維植物栽培における火耕

平田尚子(からむし工芸博物館学芸補助員)

稲田辰彦(ノックン作家)

茅葺き民家を支えるコシ原の火入れ

飯田辰彦(ノックン作家)

II 焼畑像をめぐる

会津農書からみる火耕

佐々木長生(福島県立博物館専門員)

近世農政家の焼畑観

原田信男(国士館大学21世紀アジア学部教授)

近代林学と焼畑

米家泰作(京都大学文学研究科准教授)

新しい農学授業と地域興しの連携

山口 聰(玉川大学教授)

III 日本と周辺の焼畑

蝦夷地における近世アイヌの農耕

山田悟郎(北海道開拓記念館学芸員)

カブと焼畑

江頭宏昌(山形大学准教授)

四国山地の限界集落における焼畑と文化環境

橋尾直和(高知県立大学教授)

沖縄における焼畑

宮平盛晃(沖縄国際大学非常勤講師)

台湾原住民における焼畑

山田仁史(東北大学准教授)



宮崎県椎葉村の火入れ

IV アジアとアフリカの焼畑

南九州とラオス北部の竹の焼畑

川野和昭(鹿児島県歴史資料センター黎明館学芸専門員)

ラオス北部地域にみる焼畑の終焉とイネ遺伝資源の消失

武藤千秋(京都大学農学研究科技術補佐員)

佐藤雅志(東北大学准教授)

なぜ、アフリカの焼畑なのか 佐藤康也(九州大学大学院准教授)

登つて枝を打つか、地上で切り倒すか

岡恵介(東北文化学園大学教授)

養分動態からみた焼畑の地域比較論

田中壮太(高知大学准教授)

V 史料論

中日火耕・焼畑史料考

原田信男

白山麓一ハケ村とむし関係史料について

山本智代(錦城学園高等学校教諭)

VI 附録DVD

白山麓一ハケ村村絵図集

山本智代

焼畑関係文献目録

江頭宏昌・米家泰作・原田信男

あとがき 鞍田崇(総合地球環境学研究所准教授)・原田信男



ザンビア北東部・ベンバの樹上伐採

▼A5判・六〇〇頁／定価九、四五〇円

茶の湯と音楽

岡本文音著 (高野山大学客員教授)

▼A5判・三三八頁／定価八、一九〇円

【1月刊行予定】

茶の湯の美的価値観や性格は、現存する道具や茶室、道具名物記や描かれた茶室の図面など、形として残されたものの考証から論じられてきた。だが、本書では「音楽」という視点から、その論考を試みる。室町時代後期の草創期から江戸時代初期までの文献をひもときつつ、「音楽」の世界をとらえてみる茶の湯の美意識を、大きく能楽(第1章)、「峯すり」(第2章)、茶の湯の釜の煮え音「五音ノ湯アヒ」(第3章)、茶の湯空間における音(第4章)という4つのトピックから明かす。

【内容】

- 序章 茶の湯の音楽
- 音楽という用語とその概念
- 第一章 茶の湯と能楽
- 茶会記に登場する能楽者たち
- 第二章 「峯すり」考
- 「南方録」における「峯すり」の表現するズレの考察
- 第三章 「五音ノ湯アヒ」考
- 茶の湯の釜の煮え音をめぐって
- 第四章 茶の湯の音楽
- 「日本教会史」における「市中の山居」を糸口にして

いけばなにみる日本文化

鈴木榮子著 明かされた花の歴史

「お稽古事」としてとらえられがちで、外形の歴史にしか注目されてこなかったいけばな。その精神に学問的な光をあて、日本文化という大きな枠組みの中でとらえる。外国人向けの「英語でいけばな」教室を主宰する著者が、いけばなに継承される精神を探る。図版多数掲載。

【好評2刷】

▼四六判・三三八頁／定価二、七三〇円



近代数寄者のネットワーク

齋藤康彦著 (山梨大学人間科学部教授)

▼A5判・二五六頁／定価四、二〇〇円

【1月刊行予定】

茶の湯を愛した実業家たち

高橋義雄、根津嘉一郎、小林一三……彼ら近代実業家は明治から昭和初期にかけて互いに激しく争い、経済の発展に貢献した。その一方で、茶道を愛し、数寄者と称された彼らが茶会において何度も同席し、財閥の枠を超えた交流が繰り返られていたことはほとんど知られていない。本書は、近代実業家と茶の湯に関わる単なるエピソードの紹介ではなく、従来顧みられなかった茶会記録である『茶会記』のデータ分析を通して政界・官界・実業界を横断するネットワークを析出するものである。

【内容】

- 第一章 茶の湯の復興と近代数寄者の登場
- 第二章 新興財界人の台頭
- 第三章 近代数寄者の大寄せ茶会と社会文化事業
- 第四章 キーパーソン高橋義雄の世界
- 第五章 近代数寄者の世代交代
- 第六章 近代数寄者の地域的展開
- 第七章 美術・骨董品蒐集家の存在形態と地域分布
- 第八章 近代数寄者の茶界の終焉

萬象録

高橋箒庵日記(全9巻・既刊8冊)

大濱徹也・熊倉功夫・筒井絢一校訂

三越百貨店の誕生に貢献した箒庵は、引退後ももっぱら茶の湯の研究、啓蒙活動に傾注し、近代茶道鼓吹の第一人者とされた。本書は、箒庵の明治45年から大正10年までの日記で、内容は政治・経済・文化・美術など多岐にわたる。最終巻(未刊)には解説・総索引を付す。

▼A5判・平均四五〇頁／既刊揃定価六九、三〇〇円



近代日本における

書への眼差し

日本書道史形成の軌跡

〔1月刊行予定〕

高橋利郎 著

毛筆で書かれた肉筆の文字資料が、近代に「書」として位置付けられていく過程を、書道史に関する出版をはじめ、宝物調査や展覧会の列品、また文化財関連の法令から探り、近代書道史形成の軌跡をたどる。さらに、近代数寄者が私的に書跡を鑑賞する場について考察し、彼らを取り巻く文化環境を総合的に理解し、その書跡へのまなざしの影響の大きさを論じる。

〔内容〕

- 序章 書跡の評価に関する諸問題／「美術」と「書」の近代／美術史における書／書跡の位置付け
- 第一章 御歌所と仮名 歌と書／皇国の歌／御歌所と書／交錯する和歌と書
- 第二章 日本書道史の構築 大口周魚から尾上柴舟へ 大口周魚の手鑑制作と書道史観／尾上柴舟と書道史
- 第三章 国家の名筆 書跡の展覧と列品／文化財保護関係法令と書跡
- 第四章 近代における書跡鑑賞の場 近代の数寄者と書／近代文人とそのいとなみ

動物・植物写真と

日本近代絵画

中川馨 著

〔1月刊行予定〕

「明治後期から太平洋戦争以前の日本における動物・植物写真」を考察範囲とし、それら写真集の歴史にもスポットをあてて概説。またその写真集が、美術資料として担った役割を解明し、近代日本の「写真」と「絵画」との関連性を論究。とくに、京都出身の写真家、岡本東洋（一八九一～一九六九）に注目し、多彩な近代美術家と写真家との交流を浮き彫りにする。関連図版九四点。

〔内容〕

- 第一章 日本の動物・植物写真集についての今日的な理解
- 第二章 初期の動物・植物写真集 西洋の動物・植物写真／明治期の日本の写真事情／日本最初の川井写真館による動物・植物写真集／学術資料への動物・植物写真の利用／初期の生態写真集
- 第三章 写真家岡本東洋 写真家になるまでの経緯／太平洋戦争以前の仕事／太平洋戦争以後の仕事
- 第四章 岡本東洋の動物・植物写真撮影 撮影の動機／対象としての動物・植物／撮影方法
- 第五章 岡本東洋の動物・植物写真集の考察 代表的な三種の写真集／『花鳥写真図鑑』の考察／『東洋花鳥写真集』／『美術写真大成』／当時の岡本東洋の作品に対する評価
- 第六章 岡本東洋の写真と美術家の作品との関連性 美術家の写真利用法／岡本東洋の写真と画家の代表作との構図の類似性 ながかわ・かおる…一九七四年京都市生。日本大学博士（芸術学）。池坊短期大学、福井工業大学で非常勤講師を務める。



岡本東洋撮影



たかはし・としろう…一九七二年静岡県生。大東文化大学大学院博士後期課程修了、博士（書道学）。成田山書道美術館主任学芸員を経て、現在、大東文化大学文学部准教授。

著書に『江戸の書』、成田山書道美術館編『日本の書 維新～昭和初期』（以上、二玄社）など。

▼A5判・三二〇頁／定価五、〇四〇円

▼A5判・二五六頁／定価五、二五〇円

翻訳文学の 視界

近現代日本文化の変容と翻訳

井上健編

二〇二二年一月刊行予定

◆翻訳文学とは何であるのか――。

明治維新後の日本にとって翻訳は、西洋文明に学び、近代国家の骨格を整えるために必要な、国家的事業であった。外国文学の翻訳は近代日本文学の形成に大きな影響を及ぼし、そして今日、すべての日本現代文学は、執筆される時点ですでに翻訳されることを想定しているといえよう。

◆直訳と意訳、翻訳者の役割、原作者の言語意識……。言語が自国文化と深く関わる以上、翻訳文学はつねに複雑な要素をはらむ。最前線で活躍中の研究者たちが、比較文学・比較文化研究の立場から翻訳文学の諸相を語り、その可能性を探る。

◆翻訳文学のテキスト・入門書として最適の一書。

▼A5判・二八八頁／定価二、六二五円

目次

第一部 近代日本の翻訳文学

明治二〇年代の翻訳と日本近代文学の《生成》

山田潤治（大正大学専任講師）
魔術的ファンタジーとSFの交叉点
私市保彦（武蔵大学名誉教授）

―春浪・『アラビアンナイト』・ヴェルヌ―

リアリズムの翻訳 翻訳のリアリズム 柏木隆雄（大手前大学副学長）

文学の翻訳から翻訳文学へ 井上 健（東京大学教授）

―昭和初期のヘミングウェイ、プルースト翻訳を事例に―

第二部 翻訳者の役割

現代語翻訳の日本語―谷崎潤一郎と与謝野晶子の『源氏物語』訳―

中村ともえ（静岡大学講師）
翻訳におけるジェンダーと《女》の声の再生―NaomiからKitchenまで―

金 志映（東京大学博士課程）
翻訳者の透明性について
上西哲雄（東京工業大学教授）

―村上春樹訳『グレート・ギャツビー』をめぐる―

第三部 翻訳文学の位相

世界文学としての翻訳文学 ソートン不破直子（日本女子大学名誉教授）

―ゲーテ、マルクス、シュビツァ、モレッティ―
翻訳の詩学・詩学の翻訳―近現代日本詩歌の英訳を中心に―

リース・モートン（東京工業大学教授）
原作者に《なる》

―ボルヘス『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナールから―
諸坂成利（日本大学教授）

母語の外に出ること…エクソフォニイの可能性をめぐる
―多和田葉子と《翻訳》について―
依岡隆児（徳島大学教授）

中世長崎の基礎的研究

外山幹夫著

【12月刊行予定】

中世長崎、特に肥前国西南部の松浦郡・高来郡・彼杵郡に着目し、松浦氏・有馬氏などの在地武士団の成立・発展、領国支配の実態や南蛮貿易の推移について論じ、その独自性を明かす。

【内容】

第一部 肥前国松浦郡

第一章 松浦氏の出自とその党的性格

出自と発展／松浦党の性格／党の性格と鎌倉幕府

第二章 松浦党の一揆契諾状と押書・契約状

党の拡大と上・下松浦党／一揆契諾状の作成 ほか

第三章 松浦氏の領国支配

戦国大名への過程／戦国大名としての松浦氏 ほか

第二部 肥前国高来郡

第一章 肥前国高来東郷・高来西郷と高来一揆

肥前国高来東郷・高来西郷の成立／高来一揆の性格

第二章 有馬氏の領国支配

有馬氏発展の契機／五段階の推移／領国の支配 ほか

第三部 肥前国彼杵郡

第一章 平安末・鎌倉期の長崎

莊園公領制の成立とその推移／武士の登場とその活動 ほか

第二章 南北朝・室町期の長崎

動乱の勃発と福田氏の活動／深堀・矢上両氏の活動 ほか

第三章 戦国期の長崎

長崎氏と長崎港／六丁町の成立／長崎をめぐる諸権力

▼A5判・四一〇頁／定価七、八七五円

とやま・みきお：一九三二年生。長崎大学名誉教授、長崎市史編さん委員会委員長。

九州の蘭学

越境と交流

ヴォルフガング・ミヒェル／鳥井裕美子／川島真人編

近世、西洋への唯一の窓口であった長崎及び九州各地で、人々が在来の学術とは異なる西洋近代科学にどう向き合い、学び取って、世のため人のために役立てたのか、あるいは来日した西洋人が、知的交流や技術移転にどれほど貢献したのかを、最新の研究成果に基づき、彼らの業績と足跡を通して明らかにする。

【好評につき増刷】

▼四六判・三八〇頁／定価二、六二五円

一八世紀日本の文化状況と

笠谷和比古編

国際環境

日本の18世紀の文化的状況はいかに形成され、それらは東アジア世界、また西洋世界までふくめたグローバルな環境下で、いかに影響を受けつつ独自の展開を示したか。多角的にアプローチした国際日本文化研究センターでの共同研究の成果23篇。

【8月刊行】

▼A5判・五八二頁／定価八、九二五円

朝鮮科学史における近世

任正赫著

洪大容・カント・志筑忠雄の自然哲学的宇宙論

朝鮮で、宇宙の構造と生成について論じた学者、洪大容（一七三一～一九三〇）。本書は洪の無限宇宙論の、宇宙論発展史における意味や朝鮮科学史および18世紀自然科学における位置を検討することによって、洋の東西の宇宙論の本質を解き明かす。付録として洪大容著「鑿山問答」の原文と日本語訳を収載。

【10月刊行】

▼A5判・二八二頁／定価六、三〇〇円

東国における 武士勢力の成立と展開

東国武士論の構築

山本隆志著

【1月刊行予定】

武士研究は社会経済史的在地領制論から国家史的職能論へと変化してきたが、それらをふまえた政治史的論究が求められている。本書では、東国武士を武士勢力としてとらえ、京・鎌倉での活動と連動しながら本領で法会・祭祀を主催するなかで政治的支配力を形成していることを、具体的に論じる。

【内容】

- 序章 東国武士研究の視座
- 第一章 北関東における武士勢力成立の政治史
- 第二章 内乱のなかの武士勢力成立
- 第三章 関東武士の都・鄙活動
- 第四章 関東における武士と法会・祭祀との関係
- 第五章 関東御家人那須家の成立と東・西での展開
- 第六章 上野国新田莊世良田宿の存立構造
- 第七章 東国の宿と馬市・馬喰
- 第八章 莊園領主知行の後退と武士勢力展開の新局面
- 終章 総括と展望

やまもと・たかし……一九四七年群馬県生まれ。東京教育大学文学部卒業、博士(文学)。現在は筑波大学人文社会学系教授。

▼A5判・三八四頁／定価六、八二五円

平安時代貿易管理 制度史の研究

渡邊誠著

【2月刊行予定】

九世紀以降、日本の対外交貿易は朝鮮半島・中国大陆から来航する海外の商人(海商)によつて担われてきた。従来、平安時代の貿易に対する国家の関与は、内外の交易者と対立的に捉えられていることが多かった。しかし、人びとの活動を即座に国家権力と対峙させる理解は今や再考を迫られている。本書は海商の貿易活動を国家が管理する「制度」を中心にすえて、その消長を明らかにすることで、新たな貿易史像を呈示する。

内 容

- 第1章 承和・貞観期の貿易政策と大宰府
- 第2章 文室宮田麻呂の「謀反」
- 第3章 藤原元利万侶と新羅の「通謀」
- 第4章 律令国家の対外交貿易制度とその変容
- 第5章 管理貿易下の取引形態と唐物使
- 第6章 平安期の貿易決済をめぐる陸奥と大宰府
- 第7章 年紀制と中国海商
- 第8章 年紀制の消長と唐人来着定
- 第9章 十二世紀の日宋貿易と山門・八幡・院御廩
- 第10章 大宰府の「唐坊」と地名の「トウボウ」

わたなべ・まこと……一九七七年、岡山県生。広島大学大学院文学研究科博士課程後期修了。博士(文学)。現在 広島県信用組合六〇年史編纂専門委員・福山大学非常勤講師。

▼A5判・四〇〇頁／定価七、三五〇円

典籍と史料

龍谷大学仏教文化研究叢書 28

大取一馬編

【10月刊行】

一九六(昭和三十)年、親鸞聖人大遠忌記念事業の一環として開設された、龍谷大学仏教文化研究所の研究者陣による、真宗学・仏教学・哲学・教育学・史学・文学等の分野にまたがる広汎な仏教文化の最新研究成果。

第1部◆典籍編 『伊勢物語』業平時代の成立について 内田美由紀

『統詞花集』考 鈴木徳男／社頭歌合の歌題構成と位署 安井重雄／和歌における『和漢朗詠集』の受容 岩井宏子／式子内親王歌の本質 小田剛／『源注密勘』古筆初管見 日比野浩信／西光と地蔵菩薩 浜畑圭吾／『沙石集』諸本異同から見た梵癖本文の特性 加美甲多／『龜山殿七百首』伝本考(統) 酒井茂幸／後柏原天皇の三代集仮名句題について 小山順子／絵仏師「宅間法眼」の画業と説話三浦俊介／地獄の馬の表現史 田村正彦

第2部◆史料編

古代尺よりみた法隆寺遺宝 關根真隆／後鳥羽院の新古今撰集について 大取一馬／『教行信証』「信巻」逆勝撰取釈について 玉木興慈／龍谷大学図書館蔵 禿氏文庫蔵『興福寺奏達状』について 楠淳澄／禿氏文庫本『因明十題』について 後藤康夫／解説 上人貞慶と同法達との『契約』 新倉和文／上杉謙信祈願所新義真言宗長福寺の唱導資料 原田信之／神道歌学の成立 三輪正胤／藤門周斎序『法楽寺奉納百首和歌』について 日下幸男／福井崇蘭館旧蔵・光格天皇宸翰尺牘について 内田誠一／『妙好人伝』と『統妙好人伝』の出版と流通 万波寿子

おおとり・かずま：一九四七年生。龍谷大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。現在、龍谷大学文学部教授。

▼A5判・六八〇頁／定価八、九二五円

禿氏文庫本

龍谷大学善本叢書 29

大取一馬責任編集

龍谷大学名誉教授禿氏祐祥博士寄贈の文庫を、龍谷大学仏教文化研究所の指定研究のもと、仏教・真宗・国史・国文の4班で調査。各班から善本に値するものを数点ずつ選び、影印として一冊にまとめて刊行。

▼A5判・六七四頁／定価一四、七〇〇円

日本古典随筆の研究と資料

糸井通浩編

龍谷大学仏教文化研究叢書 19

龍谷大学図書館が所蔵している、日本の古典随筆に関する伝写本を悉皆調査した研究プロジェクト「古典随筆伝写本の研究」の成果。

▼A5判・四八二頁／定価七、五六〇円

中古中世和歌文学論叢

大取一馬編

龍谷大学仏教文化研究叢書 9

『四十人集』(龍谷大学図書館蔵 写字台文庫旧蔵)を調査・研究する課程で見出された様々なテーマによる共同論集。

▼A5判・三〇〇頁／定価八、一九〇円

中世の文学と学問

大取一馬編

龍谷大学仏教文化研究叢書 15

中世の文学や学問の特質の一端を、「中世の学問」「中世の文学」「中世の作品の享受とその展開」の三章に分けて考察・解明した共同論集。

▼A5判・四九二頁／定価八、八二〇円

中世近世和歌文芸論集

龍谷叢書 15

日下幸男編

編者の華甲記念として、関西を中心に活動する近世和歌輪読会による初の論文集。現在の中世・近世の和歌研究に一石を投じる意欲作一七篇。

▼A5判・四三二頁／定価六、三〇〇円

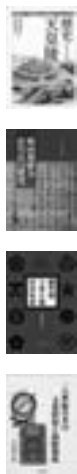
禁裏・公家文庫研究

田島公編

禁裏文庫収蔵の写本や、公家の文庫収蔵本に関する論考・データベース等を収載。

一・二輯 ▼B5判・各三九〇頁／定価各一〇、二九〇円
三輯 ▼B5判・四九六頁／定価二二、三九〇円

●●日本史・考古学・民俗●●



歴史のなかの天皇陵〔2刷〕

高木博志・山田邦和編

二、六二五円

東アジアのなかの日本

上田正昭著

二、五二〇円

奈良朝人物列伝『続日本紀』薨卒伝の検討

林陸朗著

七、三五〇円

安祥寺資財帳

京都大学文学部日本史研究室編

五、七七五円

仁明朝史の研究

角田文衛監修・古代学協会編

七、三五〇円

平安京とその時代〔残部僅少〕

朧谷壽・山中章編

九、四五〇円

日本古代典籍史料の研究

鹿内浩胤著

七、〇三五円

九条家本延喜式(一) 東京国立博物館古典籍叢刊1

東京国立博物館古典籍叢刊編集委員会編

一五、七五〇円

御堂関白記全註釈

長和5年

山中裕編

一二、〇七五円

御堂関白記全註釈

御堂御記抄(長徳元年)／
長徳4年／長保元・2年

山中裕編

五、二五〇円

禁裏・公家文庫研究 第三輯

田島公編

一二、三九〇円

日本古代都市史研究

古代王権の展開と変容

堀内明博著

一五、七五〇円

後鳥羽院政の展開と儀礼

谷昇著

六、三〇〇円

房総風雅史 古代・中世編

小倉光夫著

五、九八五円

花園院宸記 第18、20回配本

宮内庁書陵部編

(揃) 一、一七六、〇〇〇円(分売可)

中世京都の空間構造と礼節体系

桃崎有一郎著

七、五六〇円

中世史料学叢論

藤本孝一著

九、四五〇円

中世前期女性院宮の研究

山田彩起子著

五、八八〇円

京都の都市共同体と権力

思文閣史学叢書

仁木宏著

六、六一五円

一休派の結衆と史的展開の研究

矢内一磨著

八、一九〇円

東寺文書と中世の諸相

東寺文書研究会編

一一、五五〇円

東寺百合文書 第七・八・九巻

京都府立総合資料館編

(各) 九、九七五円

戦国期権力佐竹氏の研究

佐々木倫朗著

六、〇九〇円

戦国大名武田氏の権力構造

丸島和洋著

八、九二五円

織豊期主要人物居所集成

藤井讓治編

七、一四〇円

武士と騎士 日欧比較中近世史の研究

小島道裕編

九、四五〇円

松前景広『新羅之記録』の史料的研究

新藤透著

一一、六〇〇円

近世琵琶湖水運の研究

杉江進著

九、四五〇円

近世の環境と開発

根岸茂夫・大友一雄・佐藤孝之・末岡照啓編

七、八七五円

地域開発と村落景観の歴史的展開

原田信男編 多摩川中流域を中心に

九、四五〇円

口頭伝承と文字文化

文字の民俗学 声の歴史学

笹原亮二編

七、三五〇円

近世長崎司法制度の研究

安高啓明著

五、九八五円

武士の精神(エトス)とその歩み

武士道の社会 思想史的研究

アレキサンダー・ベネット著

五、〇四〇円

住友史料叢書 24・25

住友史料館編

(各) 九、九七五円

伝統産業の成立と発展

播州三木金物の事例

桑田優著

六、八二五円

一八世紀日本の文化状況と国際環境

笠谷和比古編

八、九二五円

九州の蘭学〔2刷〕

W・ミヒエル・鳥井裕美子・川島真人共編

二、六二五円

熊本藩の地域社会と行政

近代社会形成の起点

吉村豊雄・三澤純・稲葉継陽編

九、四五〇円

近代日本と地域振興

京都府の近代

高久嶺之介著

六、八二五円

北垣国道日記「塵海」

塵海研究会編

一〇、二九〇円

明治期における不敬事件の研究

小股憲明著

一三、六五〇円

文人世界の光芒と古都奈良

大和の生き字引・水本要太郎

久留島浩・高木博志・高橋一樹編

八、一九〇円

光芒の大正

川内まごころ文学館蔵 山本實彦関係書簡集

改造社関係資料研究会編

五、二五〇円

原三溪翁伝〔残部僅少〕

藤本實也著

一六、八〇〇円

魂の指定席

新島襄を語る6

本井康博著

一、九九五円

ハンサムに生きる

新島襄を語る7

本井康博著

一、九九五円

ビーコンヒルの小径

新島襄を語る8

本井康博著

一、九九五円

日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚

松田利彦・やまだあつし編〔残部僅少〕

一三、六五〇円

象徴天皇制の形成と定着

富永望著

五、〇四〇円

古井喜実と中国

日中国交正常化への道

鹿雪瑩著

三、九九〇円

金鱈叢書 第35・36・37輯

徳川黎明会編

(揃)二九、九二五円(分売可)

●●東洋史●●

高句麗壁画古墳と東アジア

門田誠一著

九、〇三〇円

中国五代国家論 佛敎大学研究叢書12

山崎寛士著

六、八二五円

近世東アジア海域の文化交渉

松浦章著

九、四五〇円

青島の都市形成史：1897-1945

樂玉璽著

七、一四〇円

大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書17

東アジア経済史研究 第1集

中国・韓国・日本・琉球の交流

大阪経済大学日本経済史研究所編

四、二〇〇円

立憲国家中国への始動

明治憲政と近代中国

曾田三郎著

八、四〇〇円

朝鮮近現代史を歩く

京都からソウルへ

太田修著 佛敎大学鷹陵文化叢書20

一、九九五円

●●西洋史●●

一六世紀イングランド農村の資本主義発展構造

松村幸一著

一四、七〇〇円

●●思想・教育史●●

デイドロとルソー 言語と《時》

小宮彰著

十八世紀思想の可能性
二、九四〇円

知の伝達メディアの歴史研究

辻本雅史編

教育史像の再構築
五、九八五円

William Smith Clark の教育思想の研究

小枝弘和著 札幌農学校の自由教育の系譜

三、一五〇円

西村茂樹研究

明治啓蒙思想と国民道徳論

真辺将之著

八、一九〇円

増補改訂西村茂樹全集 第7・9・10・11巻

日本弘道会編

(揃)七五、〇七五円(分売可)

韓国「併合」前後の教育政策と日本

本間千景著 佛教大学研究叢書8

五、八八〇円

同志社女学校史の研究

宮澤正典著

二、九四〇円

●●宗教史●●



太子信仰と天神信仰

信仰と表現の位相

武田佐知子編

六、八二五円

日本近世の宗教と社会

菅野洋介著

八、一九〇円

佛教大学国際学術研究叢書1

生命論と霊性文化

仏教への問い

第20回国際仏教文化学術会議実行委員会編

二、一〇〇円

般舟讚私講

大塚靈雲著

三、六七五円

観経疏之抄

玄義分中

浄土宗叢書第1巻

豊田元彦監修／西山禅林学会発行

五、二五〇円

西山浄土教の基盤と展開

五十嵐隆幸著

四、二〇〇円

大本山くろ谷 金戒光明寺

浄土宗大本山くろ谷金戒光明寺発行

宝物総覧

二九、四〇〇円

法然伝承と民間寺院の研究

平祐史著

九、四五〇円

天翔ける白鷗

愚中周及の生涯

児玉修著

一、六八〇円

天龍寺文書の研究

原田正俊編

一四、七〇〇円

悟溪宗頓

虎穴録訳注

〔残部僅少〕

芳澤勝弘編著

一〇、五〇〇円

江月宗玩

欠伸稿訳注

乾・坤

芳澤勝弘編著

(各)九、九七五円

瑞泉寺史

横山住雄著

二一、〇〇〇円

神社継承の制度史

神社史料研究会叢書V

梶山林繼・宇野日出生編

七、八七五円

アメリカン・ボード200年

本井康博著 同志社と越後における伝道と教育活動 五、二五〇円

●●医学史・科学史●●



茶の医薬史 中国と日本

岩間眞知子著

九、四五〇円

朝鮮科学史における近世

洪大容・カント・志筑忠雄の自然哲学的字宙論

任正赫著

六、三〇〇円

小児科学の史的変遷

深瀬泰旦著

九、四五〇円

シーボルトが蒐集したシダ標本

加藤信重著

七、三五〇円

緒方洪庵 幕末の医と教え

中田雅博著

二、六二五円

近代医療のあけぼの 幕末・明治の医事制度

青柳精一著

四、九三五円

京都療病院お雇い医師シヨイベ 滞日書簡から

森本武利編著

七、三五〇円

情熱の移植医 田中絃一の新たな挑戦

谷澤忠彦著

一、六八〇円

●●技術史・建築史●●



技術と文明 30・31

日本産業技術史学会編

(各)二、一〇〇円

春秋 京大和翠紅館

平安から平成まで 京の雅

木村幸比古・中根史郎・中村昌生著

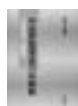
二、九四〇円

船簞笥の研究

小泉和子著

六、三〇〇円

●●農業史●●



中近世農業史の再解釈 『清良記』の研究

伏見元嘉著

八、一九〇円

焼畑の環境学

いま焼畑とは

佐藤洋一郎監修／原田信男・鞍田崇編

九、四五〇円

●●芸術・工芸・華道・茶道史●●



風俗絵画の文化学

都市をうつすメディア

松本郁代・出光佐千子編

六、八二五円

田能村竹田基本画譜

宗像健一編著

二九、四〇〇円

追憶の記

画家芝田米三と歩んだ人間賛歌の50年

芝田藤子著

二、一〇〇円

奈良千三百年ものがたり

すぎきたみこ著

一、六八〇円

近世京焼の研究

岡佳子著

六、六一五円

応用美術思想導入の歴史

ウィーン博参同より
意匠条例制定まで

天貝義教著

七、八七五円

革新の書人河東碧梧桐

島田三光著

五、二五〇円

いけばなにみる日本文化〔2刷〕

鈴木榮子著 明かされた花の歴史

二、七三〇円

武野紹鷗 わびの創造

戸田勝久先生喜寿記念論集刊行会編

一、六〇〇円

茶譜

茶湯古典叢書5

谷晃・矢ヶ崎善太郎校訂

二、〇〇〇円

藤村庸軒年譜考

白奇顕成著

三六、七五〇円

藤村庸軒をめぐる人々

白奇顕成著

一七、三二五円

茶の湯文化と小林一三

逸翁美術館編

二、〇〇〇円

尾陽 第5・6・7号

徳川美術館編

(各)三、一五〇円

●●日本文学・中国文学●●



金瓶梅研究 佛敎大学研究叢書6

荒木猛著

八、九二五円

俱舎論音義の研究

西崎亨著

九、四五〇円

日本の心と源氏物語 シリーズ古典再生2

岡野弘彦編

一、八九〇円

歴史のなかの源氏物語 シリーズ古典再生3

山中裕編

二、三一〇円

『狭衣物語』 享受史論究

川崎佐知子著

一二、六〇〇円

実国・師光全歌注釈

小田剛著

一八、九〇〇円

禁裏本歌書の蔵書史的研究

酒井茂幸著

五、八八〇円

平成新修古筆資料集 第五集

田中登編

二、六二五円

禿氏文庫本 龍谷大学善本叢書29

大取一馬責任編集

一四、七〇〇円

典籍と史料 龍谷大学仏敎文化研究叢書28

大取一馬編

八、九二五円

祈りの文化 大津絵模様・絵馬模様

信多純一著

三、六七五円

入門 奈良絵本・絵巻

石川透著

二、一〇〇円

絵巻 大江山酒吞童子・芦引絵の世界

逸翁美術館編

一、〇五〇円

松花堂昭乗と瀧本流の展開

山口恭子著

九、〇三〇円

広瀬旭莊全集 詩文篇

岡村繁・井上敏幸編

三一、五〇〇円

幸田露伴の世界

井波律子・井上章一共編

五、二五〇円

与謝野品子と小林一三

逸翁美術館編

一、〇五〇円

与謝野品子の「源氏物語礼讃歌」

伊井春樹著

一、四七〇円

・・・比較文学・・・



漱石と世界文学

坂元昌樹・田中雄次・西槇偉・福澤清編

二、九四〇円

漱石文学の水脈

坂元昌樹・田中雄次・西槇偉・福澤清編

二、九四〇円

越境する漱石文学

坂元昌樹・西槇偉・福澤清編

二、九四〇円

中国語圏における厨川白村現象

工藤貴正著

六、三〇〇円

一九二〇年代東アジアの文化交流

川本皓嗣・上垣外憲一編

二、九四〇円

一九二〇年代東アジアの文化交流Ⅱ

川本皓嗣・上垣外憲一編

大手前大学比較文化研究叢書7
二、六二五円

言語のあいだを読む 日・英・韓の比較文学

大澤吉博著

九、四五〇円

日本文学の「女性性」

増田裕美子・佐伯順子編

二、四一五円

——思文閣グループの逸品紹介——

美の縁

び

よすが



写実を基調とした作風で知られる平櫛田中の作品イメージからは外れた、ユーモラスでふくよかな印象を受ける「大黒天尊像」。田中の作品群の中でも小品に属する本作は、題材のめでたさから人気があったのでしょうか、長年にわたって制作されています。

箱書によると、大黒様が持っている「槌」について、これはいわゆる「打出の小槌」ではなく、「のらくら者」

❖ 福聚大黒天尊像 ❖

平櫛田中

を懲らしめるための「槌」であると書かれています。田中はさまざまなエピソードから、その制作姿勢が非常にストイックであったことが知られています。この「槌」を手にした大黒様を作り続けたのは、田中自身が「のらくら者」にならないよう、自らを律するためであったのかもしれません。

(ぎやらりい思文閣・大塚有為)

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355

TEL (075)531-0001 Fax (075)531-5533

<http://www.shibunkaku.co.jp/>

info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵などから学術書全般に至るまで、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております（年4回程度発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。



青樓美人合姿鏡

全三冊

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355

☎ (075)752-0005 Fax. (075)525-7155

<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>

e-mail kosho@shibunkaku.co.jp

美術品を売る、買う。

「思文閣大交換会」が
いちばんの方法です。

思文閣大交換会は、年4回の大入れ会。
美術品を売りたい方、買いたい方双方に
ご満足いただいております。

詳細・お問い合わせは

思文閣京都本社

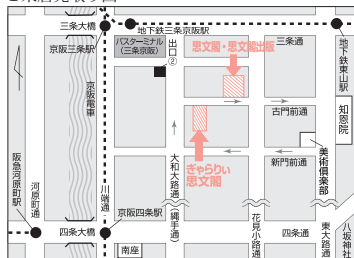
TEL (075)531-0001

mail info@shibunkaku.co.jp

ぎゃらりい 思文閣

ぎゃらりい思文閣では、「ようの美」をコンセプトに、陶磁器や漆器など様々な分野の工芸品を取り揃えています。また、現在活躍されている多彩な作家の個展や企画展を随時開催しています。ぜひ一度お立ち寄り下さいませ。

ご来店見取り図



〈京阪〉三条 〈地下鉄東西線〉三条京阪下車
(出口②) 徒歩約3分 〈市バス〉三条京阪

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 386

TEL 075-761-0001 FAX 075-533-1779

gallery@shibunkaku.co.jp

<http://www.shibunkaku.co.jp>